

現場発見

Site Discovery

「ポイント」を見極め、 地元と交流する現場

中部横断自動車道 平高架橋他一橋(下部工)工事

富士川の清流に沿った美しいまち、山梨県南部町。その集落の上空六〇メートルに高速道路の橋が架かる。静岡、長野両県を結ぶ中部横断自動車道の平高架橋だ。その建設現場は住宅地の目と鼻の先。閑静な地域の日常を守りながら高速道路を支える橋脚の築造が進む。現場の支柱は地元とともにまちを思いやる心だった。

建設が進む平高架橋。その右手の尾根を超えた工区が大堀川橋だ。両橋あわせて橋脚を9基、橋台は3基施工する。施工区間は973m。2012年7月に着工し、今年9月の完工を目指している。



美しい集落の中空を走る高架橋

中部横断自動車道は、静岡市清水区の新清水、小諸市の佐久小諸の両ジャンクションをつなぐ全長一三二キロメートルの高速道路だ。太平洋と日本海を結び、新東名と中央自動車道の連結によって首都圏の巨大な環状ネットワークを形成する。並行する国道五二号線の災害時代替道路、農産

物、海産物の物流促進、移動時間の短縮などを主な目的として整備が進められている。

今回訪ねたのはその太平洋寄り、富士山の裾野に広がる南部町で進む高架橋の下部工建設現場だ。「工事名に『その他』とあるのは、全長約六二〇メートルの平高架橋から、約三五メートルの土工区間を挟んでもう一つ、約三二〇メートルの大堀川橋を並行して建設するためです」と施工を担当する(株)竹中土木の山本豊和所長が説明してくれた。今年三月の取材時までには、進捗状況は八〇%を超えていた。「できたところから橋の架設、上部工に引き継いでいます。工事は岩盤が硬くて苦労することもあります。概ね順調ですよ」と山本所長は話す。山の緑を背景に白く輝く真新しい橋脚が姿を見せていた。

説明会の前に近隣の声を集める

現場周辺には田畑と住宅が広がる。のどかでどこか優しさを感じさせる風景だ。「地元の皆様がいかにご迷惑をかけずに施工するか」、それがこの現場に求められた最重要課題だった。発注者であるNEXCO日本の要求事項にも環境、住民への配慮が明記されている。「住宅に近接しているので工事には一般の生活道路を使わせていただくかなくてはなりません。通学時間を避けた車両の通行時間、速度制限の厳守はもちろんですが、住民の皆さんからの要望に応え、道路の改修も行いました」。





現場発見

Site Discovery



上/大堀川橋のP1基礎部の岩盤は予想以上に硬かった。発破音と振動を抑える蒸気圧発破薬を採用して、近隣民家への影響を低減している。
 右下/春にはアマゴやアユが富士川に放流される。現場に近接する排水路、支流に濁水が流出することは許されない。毎日2回の精密な水質検査を実施、現場には濁水処理プラントを設置した。
 左下/橋の端部は急斜面になる。基礎部ではリング状の構造物で地山を補強しながら垂直に掘り下げ土留めをする「竹割り工法」が使用された。

工事概要

発注者：NEXCO中日本 東京支社
 施工者：株式会社竹中土木
 工期：平成24年7月～平成27年9月(予定)
 工事内容：橋台工、橋脚工、深礎杭



橋脚の建設にあたっては柱部外、内足場に自動昇降足場を採用し、落下防止エアバックを設置するなど、細部に渡り安全対策を施した。完工した橋脚から次工程に引き渡し、順次橋桁の施工が始まる。

そうした地元の声が届いたのは着工前、さらに工事説明会も行われていない頃のことだ。「説明会の前に周辺の七〇軒ほどのお宅を一つ一つお訪ねして懸念されていることを伺ったんです。工事車両の通行、粉塵、それから環境に対する配慮。全体で七〇件近いご意見、ご要望をお聞きすることができました」と山本所長は振り返る。そうした声をきめ細かく検討し、工事説明会では要望に答える対応策を丁寧に伝えた。この時から近隣住民との絆が強固なものとなったことは想像に難くない。「工事説明会は一方的に概要を伝える『上から目線』になりがちです。そうではなく、地元の要望に誠実に応えることで信頼関係をつくりたかったです」。そうした姿勢はこの現場に限らず、これまで一貫した山本所長のポリシーだという。

地域との絆をつくる「工事新聞」

現場事務所脇の一角に畑をつくった。近隣の農家と共同で胡瓜を育てている。「その胡瓜でつくったぬか漬けが美味しいんですよ。夏場の熱中症対策には欠かせません(笑)」。山本所長は、近隣の住民と一緒に何かが楽しいこと、面白いことをやりたいというも考えている。「現場見学会では、冬場に事務所をナイヤガラで飾り立てる!とポロッと口にしてしまいました。それでイルミネーションをやらざるを得なくなりました」。山肌に映えるカラフルな

現場
Site Discovery
発見



現場のすぐ近くに居住区が迫る。地域の環境保全は最重要課題だ。外足場の四方にメッシュシートで覆い、落下防止、粉塵の飛散抑制に万全を期した。

光の帯はさぞ住民の目を楽しませたことだろう。事務所屋上をウッドデッキにつくった「憩いの場」は地域の方々との交流スペースになっている。

そうした所長の思いは職員にも伝播していた。事務所では若手を中心になって現場の進捗状況を伝える「工事新聞」を発行している。発行は

「ます」と山本所長は語る。近所の魚屋さんには工事新聞を店頭で貼り出してPRに協力してくれていると目を細めた。

現場ごとに「ポイント」がある

こうした施策の背景には「現場ごとのポイント」があると言葉を継ぐ。山本所長は都市土木から港湾土木、土工現場まで、あらゆる工事、施工に携わってきた。若いころ赴任した現場は常に初体験の連続だった。現場のポイントを見極め、自身の経験を複合させて最適な解を見出すことは、所長を任命されるようになってからのポリシーだ。「各現場でその工事を順調に進捗させるための工夫が変わってきます。住宅エリアと近接する当現場では、やはり地元の方々との信頼関係の構築。現場の『中の人』と『外の人』



現場事務所に飾られた「ナイアガラの滝」。かたわらに「このイルミネーションは南部町の子供達へのやさやかなプレゼントです」というメッセージボードを掲示した。

月一回、最新号は三〇号になった。現場の様子を報告するだけでなく、見学会や消防署と共催したAED講習会の様子、さらにはツバメの飛来までレポートする。「工事新聞は各お宅に手渡しで配布しています。そうすることでコミュニケーションも深まり、事務所では直接言いにくい要望なども気軽に聞き取ることができ

人」を交流させ、いかに全体をまとめるかが大きなポイントになると考えたんです」。たとえば都市土木では、現場が住宅エリアであってもチラシなどで現場の様子を鋭意お知らせすることが精一杯だという。住民が多すぎて、生の声はつかみにくい。南部町の現場では、住民の顔が見える。きめ細かい対応ができる現場なのだ。

周辺環境を思いやる現場の精神

現場には現在七名の職員が常駐する。そのうち四名が二〇代から三〇代の若手だ。現場が始まった当初は不安感を隠せない様子だったが、最近は自信と責任、そしてこの職場に対する誇りを覗かせるようになったと山本所長は感じている。「率先して地域とも交流を図るようになっていきます。彼らには常に先を読む力を身につけてもらいたい」。その力が住民の立場に立って、地域に配慮する姿勢につながるのだろう。

取材を終え、近くの駅まで車で送ってくださった若手職員さんの言葉が印象的だった。「山本所長ほど地域の方々と一緒に交流しながら現場を運営される所長は少ないんじゃないかな。現場ごとにやり方を変えておられるとは思いますが、経験が豊富な方だけに勉強になります」。

小高い駅からは幾筋にも分かれながら静かに流れる富士川を挟んで現場を一望できる。モニユメントのような橋脚とその下に広がるまち並みが、一枚の美しい絵のように見えた。

Q あなたがこの現場で発見したことは何ですか？

A がむしゃらに現場と対峙していた頃は、ものづくりの楽しさや、後世にまで残る構造物に携われたことが何より嬉しかった。しかし、所長を務めるようになって約15年、現場での意識が少し変わりました。今は「若手の成長」が私のやりがいだと感じています。彼らには多くの経験を積んで、経験工学のプロになるよう指導しています。その甲斐あって、週末に次週の

工程を伝えると、月曜日に自分なりに考えた図面や資料を手に相談に来るようになりました。みんなで話し合いながら合理的なやり方、安全確保の方法を見つけています。日々成長を遂げてきた彼らとともに完工の喜びを分かち合えることが嬉しい。所長の役割は現場の方向性とポイントを示すこと。そして、潤滑油として働きやすい環境を作ることなのだと思います。



株式会社竹中土木
名古屋支店 作業所 所長
山本豊和
Toyokazu Yamamoto